

史跡探訪感想文

県外史跡探訪に参加して（長崎県）

清原 明

平成二十八年十一月十九～二十日、県外研修会に参加者二十五名と同行しました。佳き思い出が沢山有り、企画下さった役員、車内での丁寧な説明をして下さった方々にお礼を申し上げます。

初日（十九日）定刻、別府駅西口出発、延々四時間半の車中の旅、ちよつと疲れました。

最初の見学地は田平教会、二日目は外海歴史民俗資料館、遠藤周作文学館等の見学研修をしました。

貴重な各施設、沢山な資料を纏め、無知識な私ですが感想を延べさせて戴きます。

この日本という国土に、人が住む様になったのは3・5万年昔かと思われる。

その昔は岩陰や穴蔵の中で、雨風を凌ぎ、食べ物を探し、山、川、海で食物を取り、過ごし、人が生きるため「病」や「怪

我」があり、その難事を凌ぐのは、神で有り佛であったと思われる。この年代が永く続いた頃、今回、研修先であった長崎に、長崎は海を通つての海外との交流の場所、中国は無論ヨーロッパよりの交流の窓口であったと思われる。その際に日本国民が頼りにしていた、人間生きる為の、拠りどころとしていた神、佛の習慣に新しい形のキリスト教思想が、この長崎に入り、飛躍的に人びとに伝わり、長崎を中心に全国に広がったものと思われる。

そのことが、当時の国としては神仏中心の思想が侵される事を危惧し、キリスト教の抑制と弾圧が一五八七年豊臣秀吉の手でご施策が取られた。

そのことが今回研修の長崎で学び、如実にその資料を沢山見た、何と言葉に言えない、当時の制圧行為、住民の動き、只驚くばかり。これら施設資料に接し感謝しました。

キリスト教、弾圧施策の解かれた、一八七三年以降は吾々はこのことを忘れ去り、現代の平和の時代に生きる吾々としては有り難い二日間の旅行であった。

長崎県平戸地方の歴史探訪に参加して

吉 本 桂 三

世界遺産先取の宗教遺跡探訪旅行に参加して誇らしい気分
の帰途車中で、恒松先生より、「皆さん、探訪旅行の思い出
を書き残しましょう」と申されましたが、入会間もない私は
パスもよいかと思っていました。総会で再度申された。凄
まじい弾圧と迫害極刑にも屈する事なく信仰に命を捧げた精
神の尊厳性を題材に著述された「沈黙」を基に開館された遠
藤文学記念館又その立地景観の素晴らしさ。

企画をされた史談会の学究的姿勢に感銘を受けました。こ
の様に宗教に関する弾圧迫害は私の記憶にもあります。戦時
中各家庭に皇太神宮の御札を祀る事になりましたが、日蓮興
門流は曼荼羅に勧請しているので雑濫勧請ぞうらんかんとせうとなるので受け
ないと云う事が国家に違背すると云うので、議会許可の本末
究意日蓮教宗開祖山崎日光、岩田日猷両師又正宗創価教育学
会の牧口常三郎、戸田城聖氏等が拘留。

又信者も広島西署に拘留中原爆死、敗戦となり、昭和21年
8月6日慰霊祭が両師及び古川師を以って挙行され、川施餓

鬼として元安川畔で灯籠流しを、これが今日も広島風の風物詩
となっている。私は被爆者として又敗戦から極東軍事裁判に
依り歴史の抹消以後領土の侵蝕実効支配や内政不干渉の原則
無視の近隣諸国沖縄県民迄昭和35年迄存在した娼妓の問題迄
も異端視、韓国に莫大な出費の実害を受け克つ風評被害も受
けている。史実と誤解の歴史を正し直して置く事は先人の責
務と思います。然し敗戦を終戦と刷り変え「広島平和都市記
念碑」に依って作られた碑文「安らかに眠って下さい過ちは
繰返しませぬから」と国民総意の碑文も核の平和利用云々で
被爆国が米国指差により中曽根、正力両氏に依り受入れ対応
不十分のまま見切発車、日本列島に53基の原発、ビキニ環礁
第五福竜丸被爆、東海村臨界事故、福島原発の爆発事故この
一事故を以ってしてリスクの甚大さが理解出来ない国家国
民、それは震災と云う不可抗力と釈明天災と公言、原発が無
かりせば島原噴火の如く復興の兆しも有るうに未だ帰郷出来
ないのは原発の事実である事を今一度再確認して下さい。

被爆者は核と人間は共生出来ないから非核運動、その被爆
者も全国20万人を割り高齢化、自身の自由も利かない人が大
半となりました。

今一度先祖の残して呉れた美しい自然と共生の知恵と歴史

の再認識をし、ならぬ事はならぬ、常に万が一を思い、備へ有れば憂い無し、成らぬ堪忍するが堪忍、辛抱する気に華が咲くの日本の美德を失い、欲する儘に満す事を最良の方法とそれが自由との傾向の社会。何とも自己中心的な偏りが見えて来る様で憂うるのは年寄の故か、今一度今日の在り方即ち歴史を見詰め直し、核廃絶の世界を望んで下されば幸甚先頃米大統領オバマ氏が広島訪問慰霊碑参拝、投下国の現職が国内事情を押しての行動は核兵器の無い世界、プラハの重さと感じ、崇高な精神は学びたい。原爆投下から慰霊碑参拝を詩に託しました。御批正ご叱声お願い致します。

当^二原爆忌^一

原爆忌に当って

閃光一剪碎^二乾坤^一

閃光一剪して乾坤を砕く

半死焦屍堆累昏

半死焦屍は堆累して昏し

慷慨弔^レ魂悲憤^ノ涙

慷慨魂を弔ふ悲憤の涙

天人不許核弾在

天人許さず核弾の在

〈大意〉

突然眼前が真白く一瞬に天地を破壊し焦土と化し半死人
焦げた屍体が累々と折り重なり一面火の海の嘆き憤り死
者への霊を弔い思い悲しみこの悲惨極まりない核兵器と
戦争は天人共に許す事は出来ない

賦^二傘寿伝言^一

傘寿の伝言を賦す

十戈^ノ被爆八句^ノ身

十戈の被爆八句の身

憲法^ノ九條^ハ從^二敗因^一

憲法九條は敗因に従る

勝者^ノ言論生^ス三戰犯^一

勝者の言論戦犯を生ず

復興^ノ努力耐^レテ人^ニ釣^{タリ}

復興の努力人に耐えて釣たり

玻琉^ノ倫理度^衡彬^{ナリ}

玻琉の倫理度(量)衡彬かなり

米統^ノ小浜抱^ク市民^一

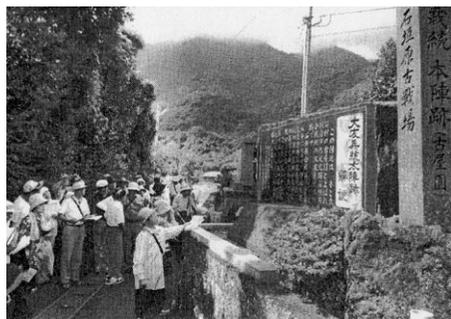
米統小浜市民を抱く

平和希^求天^ノ許^ス

平和の希求天の許す所

託^レ詩核廢^涙痕^新ナリ

詩に託す核廢涙痕新なり



平成 23 年 石垣原合戦の史跡を探訪
(南立石本町の石垣原合戦・大友本陣跡)

三〇周年記念事業

「世界遺産登録前」への旅（長崎県）

岡 部 光 瑞

平成二十八年十一月十九日（土）、二十日（日）、別府史談会県外史跡探訪（長崎・平戸）バスツアーに二十五名で参加した。

今回の県外史跡探訪の案内を見て非常に嬉しくなった。平戸の田平教会、長崎市外海歴史民俗資料館や外海の文化的景観、遠藤周作文学館等の視察が組み込まれており、以前これらの近くまで行ったが、時間的余裕が無く見学できなかった場所だった。

今日は二日目、私達を乗せたバスは一番目の視察地、長崎市外海歴史民俗資料館の駐車場に着いた。長崎市外海地区は、世界遺産候補「長崎の教会群としてキリスト教関連遺産」の一部である。キリスト教関連施設の見学時間は一時間半である。かくれキリシタンの事に触れられるという気持ちで出掛けたのであるが、展示品は、この地域のキリスト教に関する

遺品等でありそのような気持ちで吹っ飛んだ。この資料館の在る地形は、幅の狭い段々畑が海岸までせまり、そのまま海まで断崖絶壁となつているところだ。現在は国道が整備され、長崎市内からバスで一時間ほどで着くが、昭和の初め頃までは、長崎へは険しい峠を越える難路か「手漕ぎ舟で海上を往復するほうが、はるかに便利」といわれた陸の孤島だった。

資料館を何かすつきりしない気持ちで後にした。段々畑の道はやつと人が一人通れるほどの幅で、離合する時注意しながら次の見学施設へ急いだ。

フランス人マルコ・マリー・ド・ロ神父が、「外海の人々を貧しい生活から救いたい」という気持ちから設立された授産場「旧出津救助院」に着いた。この施設群は、段々畑の何枚かの畑を一枚に造成して建設されている。授産場の基礎や壁体の大部分は「ド・ロ塀」と呼ばれ、赤土を水に溶かして石灰と砂をこね合わせたもので接合し、地元の自然石を不規則に積み重ねていた。明治時代この施設群の中心となる授産場の一階では、綿織物の製糸から製織、染色、そうめんやパンの製造、醤油等の醸造が行われ、二階では、静かに祈る場所になっていた。そんな歴史を想いながら、この施設を説明して頂いた職員の方（キリスト教の信者）に、「潜伏キリシ

タン」と「かくれキリシタン」の違いを質問した。答え。潜伏キリシタンは、江戸時代に、表向きはお寺の檀家となっているが、一方でマリア観音等を通じてキリスト教を継承した人で、明治の禁教令が廃止された後、キリスト教に復帰した人の事、かくれキリシタンは、禁教令廃止後もキリスト教に復帰せず江戸時代の信仰形態を続けている人の事と説明があり納得した。今回の史跡探訪に参加した成果の一つであった。色々説明を聴きたいが時間が無い。次の施設には段々畑の急な細い石段を上り、細い道を小走りで行った。出津教会に着いた時には息が上がっていた。この教会は、ド・ロ神父の設計だ。この教会も段々畑の上の方に在り、白い二つの塔を備え、段々畑のためか横に長く、ゆつたりとした美しい教会である。建物は長崎県の文化財に指定されている。

葬儀のため内部見学は出来なかった。しかし、ここからの眺めは何も遮るものが無く、穏やかな東シナ海が眼下に見えた。この日は、十一月中旬というのに暑い位で、風も無く、ゆつくり各施設巡りを楽しむのには最適な日和。高台から外海の文化的景観を眺めるとキリスト教関連施設が点々と確認された。

外海地方の山の急こう配の斜面に石を積み重ね、段々畑を

作って、この段々畑は、北向きか南向きか分からない、海から吹きあげる風は強いだろうと思った、ここに作物を栽培し、生きる術を作り上げてきた人々がいた。それが潜伏キリシタンの人達だった。この人達を指導したのが、フランス人宣教師ド・ロ神父だった。

見学時間ぎりぎりです。駐車場に帰り着き、段々畑を振り返った時、この段々畑は、潜伏キリシタンの人達の悲しみの大地だったのか、幸せの大地だったのかと思った。



平成 19 年 別府史談会創立 20 周年記念総会
あいさつする (故) 後藤重巳前会長